

インドネシア・ジョグジャカルタおよびバンダアチェ 被災住民の意識調査と防災支援策の提案

The Attitude Survey of Disaster Victims in Jogjakarta and Banda Aceh, Indonesia
and Proposal for Disaster Assistance

○ 阪本真由美・河田恵昭

○ Mayumi Sakamoto, Yoshiaki Kawata

In this study we propose method to evaluate social vulnerability in developing countries based on the attitude survey on disaster victims of Indian Ocean Tsunami Disaster, December 26th, 2004, and Central Java Earthquake, May 27th 2006, Indonesia. Firstly, we focus on disaster philosophy which effect people's disaster attitude. Secondly, we analyze disaster behavior through disaster evacuation situation. Thirdly, we analyze the effect of disaster education to disaster philosophy. Finally, we propose disaster assistance to these areas based on analyze.

1. はじめに

本研究は、開発途上国の社会的防災力を評価する方法を開発するとともに、防災力を強化するための支援策を提案することを目的としている。一般に、開発途上国では経済的事情から構造物等による物理的な防災対策を講じることが難しく、減災のためには社会的防災力の形成が重要になる。

2004年12月26日に発生したインド洋大津波災害によりインドネシア国スマトラ島北端のバンダアチェは死者7万人を越す壊滅的な被害を被った。その1年半後の2006年5月27日に今度はジャワ島中部で地震が発生し、ジョグジャカルタは死者5000人を越す被害を被った。繰り返し災害が発生する背景には、過去の被災経験による教訓が国内で共有されておらず、それに基づく対策が実施されていないことが想定される。

本研究では、2007年7月から8月にかけて被災住民を対象に実施した調査結果に基づき、今回被災した人々が、災害を体験し災害に対しどのような意識を持つに至ったかという災害観を解析する。つぎに、災害時に地域住民がどのような行動をとったかを把握し、社会的防災力構築の観点からこれらの被災地域に求められる支援策を提案する。

2 調査結果

(1) 被災地域住民の災害観

災害観は災害に関する人々の基本的観念であり、災害行動や防災意識に対しても影響を及ぼす。本調査の結果、バンダアチェおよびジョグジャカルタでは今回の災害を「神の懲らしめ(天譴論)」と

捉えている人が多いことが判明した。また、災害観には地域差がみられ、バンダアチェでは災害の主たる原因を「神の試練」と捉えているのに対し、ジョグジャカルタでは災害を「自然現象」と捉えていた。

(2) 災害発生時の避難行動

調査の結果、災害発生時に特定の場所に避難するという概念が存在しないことが判明した。バンダアチェでは、多くの人が津波を目で確認した後逃げていた。また、ジョグジャカルタでは、地震後に家の外に避難したという回答が47%であった。

(3) 防災教育実施状況

調査の結果、57%の人が防災教育を受けたことがなく、自然災害に関する知識を持っていなかった。また、防災教育の実施により、災害観が変化することが分かった。

3 被災地域に対する支援策について

本研究の結果、インドネシアの被災地域住民の災害観は日本とは異なっていることが判明した。特にバンダアチェでは、災害が自然現象として捉えられていなかった。また、災害発生時の避難行動についても、避難場所について具体的な考えを持っていない。これは、自然災害や防災に関する正しい知識を持っていないことによるものである。このような地域において、社会的防災力を強化するには、まずは、災害観の形成という文化レベルの防災・減災策が重要である。

